



イーサポートリンク
(株)及び(株)農業支援代
表取締役社長の堀内
信介氏。



カルビー(株)相談役
の松尾雅彦氏。



きわむ元気塾塾長の横川
竟氏。

「農業経営者」読者の会

日本農業のNEXT STAGEへ 第2回全国大会開催

3月1～3日、TKP田町ビジネスセンター（東京都港区）において、『農業経営者』読者の会第2回全国大会が開催された。1日目は特別セミナー「日本農業のNEXT STAGE」、2日目はシンポジウム「世界を虜にするニッポン農業」、3日目はビジネスプランコンテスト「A-1グランプリ」が行われ、述べ220名の参加者が壇上の話に熱心に耳を傾けた。農業経営者が取り組むべき課題について活発な意見交換がなされたが、特に最終日の「A-1グランプリ」では多種多様な農業者の熱い理念が火花を散らし、刺激を受けた参加者が早くも来年の同コンテストへの参加を表明するなど、盛会のうちに閉幕となった。3日間の模様をダイジェストでお届けする。取材・文／土井学



本誌編集長の昆吉則。



(株)谷口農場代表の谷口威裕氏。



(有)ベネット代表取締役社長の青木隆夫氏。



松尾雅彦氏は「先進国農業のこれからの姿」と題して、過剰の時代が農業に求めるものとは何かを語り、事業成功の鍵を示した。



第1日目 日本農業の NEXT STAGE

官が支配してきた農業の時代は終わりを迎えようとしている。農業ビジネスのチャンスは国内外に広がりつつあるが、それは同時に農業経営者の力量が試される時代の到来でもある。大会初日は、多様な農業の可能性と、農業経営者への問いが語られた。



▲▶初日は70名を超える参加者が集まった。外食産業を熟知する横川氏が歯に衣着せぬ発言を連発し、会場全体が沸く場面も。

◀日本GAP協会の武田泰明事務局長によるJGAPのプレゼンも行なわれた。



第

2回全国大会のテーマは「日本農業のNEXT STAGE」。大会初日には同

テーマを掲げた特別セミナーが行なわれ、カルビー(株)相談役の松尾雅彦氏が基調講演を務めた。

「先進国農業のこれからの姿」と題されたこの講演では、生産・加工・販売の3者がコラボレーションするカルビーのビジネスモデルが紹介されたほか、パラダイムシフトによる21世紀型農業の特徴を指摘。「顧客とつながって品質を追求する」「かせぎ」の部分と、地域社会との関係を強める「つとめ」の部分の両輪が重要」と訴えた。

さらに事業成功の原則として、加工業者との関係を深めることで競争力がアップすることや、成長市場を見極めて勝負すること、また食品業界では「新」ではなく「置換」の発想を持つことが大切であると語った。

基調講演後のパネルディスカッションでは、松尾氏に加え、きわむ元気塾の横川寛氏、イーサポートリンク(株)の堀内信介氏、(株)谷口農場の谷口威裕氏、(有)ベネットの青木隆夫氏、コーデイネイト役の本誌編集長も登壇。農業は生産現場のイノベーションのみならず、周辺産業と連携して商品やサービスを開発していくことで発展するという印象を強めた。

第2日目 世界を虜にする ニッポン農業

日本農業の技術力や、それによって作られる農産物のブランド力を世界に広めることで、日本農業の可能性、国産農産物の価値を底上げする「Made by Japanese」。すでに海外の農場で生産を行なう先駆者と、農産物の輸出事業を展開する挑戦者たちが集まり、シンポジウムを行なった。



和郷園の毛利公紀氏。



(有)ストロベリーフィールズの遠藤健二氏。



片山りんご(株)の山野豊氏。



(株)デコボンの井尻弘氏。



▲▶ウクライナで大豆栽培にチャレンジしている木村慎一氏。現地の農家よりはるかに高い収量をあげ、自らの栽培技術の高さを証明して見せた。今後、作付面積を拡大していくという。

▼聴講者も積極的に質問を投げかけ、活発な意見交換が行なわれた。



▶▼3日間とも大会終了後に懇親会が行なわれたが、本誌連載でおなじみのヒール宮井こと宮井能雅氏は、特注Tシャツに着替えて参加。旺盛なサービス精神に一同脱帽。同シャツは女性読者限定でプレゼントするので、ご希望の方は編集部まで連絡されたし。



世界を魅了する日本農業をテーマに、第2日目はシンポジウムを開催。基調講演として本誌編集長がロシア沿海州視察ツアーの模様を報告した後、5名の実践者が登壇した。

まずは、タイでマンゴー生産を行なう和郷園の毛利公紀氏、ウクライナで大豆を生産する青森県の木村慎一氏、ベトナムでイチゴ事業に関わる(有)ストロベリーフィールズの遠藤健二氏の3名が、海外における農場運営事例を紹介。さらにこの後、農産物輸出の実践者として、片山りんご(株)の山野豊氏と、(株)デコボンの井尻弘氏が登壇し、海外マーケットの



◀記念すべき初のA-1大賞に輝いた(有)さかうえの坂上隆氏。発表した事業タイトルは「耕畜連携によるサイレージ供給ビジネス」。飼料用トウモロコシをサイレージ加工して地域の畜産農家に販売するほか、オーダーメイドのトウモロコシ生産管理事業も行なっている。



▲人物顔写真左から「日本の農業に一生を賭ける！学生委員会(通称SOLA)」の鶴沢佳史氏、奨励賞を受賞したふじさん牧場の藤田太一氏、JAICシードキャピタル賞を受賞した(株)農業総合研究所の及川智正氏。
◀大会終了後の懇親会では、受賞者の及川智正氏ら東京農大OBと現役生が、名物の「大根踊り」を披露。



現役学生から国立ファーム(有)の高橋がなり氏まで、発表者の顔ぶれは様々だったが、それぞれの事業にける思いはいずれも熱く、審査員を唸らせた。

第3日目 事業計画が激突 A-1グランプリ2009

農業が産業として発展するためには、農業経営者自らが事業計画を明文化して発表し、投資家や支援者と出会う必要がある。顧客本位の農業経営を実現するためのステップとして、ビジネスプランコンテストを実施した。

現状を語った。
第3日目は、事業者自らが農業ビジネスプランを発表することで、投資家や支援者と出会う機会を創出することを目的とした「A-1グランプリ」を開催。事前の書類審査を通過した18組の発表者が次々に登場し、熱弁を振るった。
宮城大学の大泉一貫氏や、日本経済新聞社の榎原弘志氏ら5名の審査員による厳正な審査の結果、大賞(賞金100万円)は(有)さかうえの坂上隆氏に決定。このほかJAICシードキャピタル賞には(株)農業総合研究所の及川智正氏、奨励賞にはふじさん牧場の藤田太一氏が輝いた。